



月報

No.454
2018年
3月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『安息日あんそくびに働く神の御子』

ヨハネによる福音書 5章9節後半～18節

小河信一 牧師

本日は、ヨハネ福音書の講解説教の続きを行います。

まず、前置きの話を致します。

書店には今、健康や経営などさまざまなジャンルの成功本が所狭ところせましと並んでいます。また、歴史上の偉人や英雄を取り上げている書物や雑誌も依然として人気が高いようです。そうした中で、最近では書店に、失敗体験を語った本、すなわち、失敗に光をあて、失敗から何かを学び取ろうとすることを著した本が置かれるようになりました。これは近年、失敗の原因を究明し、改善策を探究する失敗学という学問が重視されてきたのと並行しています。失敗の中に大発見・大逆転のヒントが隠されているというのは、普遍の真理でしょう。

確かに、歴史上の敗者というのは、記録が残りやすく、過小評価されがちです。ですから、勝者と敗者、双方の側から、歴史の全体を捉え直すというのは、賢明なことでしょう。

皆さんは、成功本か失敗本か、また、勝者の歴史ヒストリーか敗者の歴史ヒストリーか、どちらに関心を持たれるでしょうか。

ところで、‘The Book’と呼ばれている聖書は、成功本なのでしょうか、それとも失敗本なのでしょうか。今、ヨハネ福音書に絞って考えてみましょう。

もし、私たちが「成功」の事例ばかりを見るのならば、「失敗」した時に、私たちは困惑し、長い間、立ち直れないかもしれません。「成功」の事例では、困難に陥った時に、どうしたか、何を思ったか、が掘り下げられていない可能性があります。その点で、失敗した人や中途半端に終わった人の言葉や体験は貴重です。

まさに、ヨハネ福音書はそのような失敗や挫折に光をあてています。すなわち、信仰告白という観点から、この福音書には、成功あり、また、失敗あり、です。だからこそ、‘The Book’は奥深い、この書は力強く、人を立ち直りへと導く、と言えるのです。

ヨハネ福音書5章に出てくる38年間も病気で苦しんでいた人は、信仰告白の点で、成功していません（正確に言えば、神が成功に導いておられません）。主イエスの癒しの業により、病気から解放されたにもかかわらず、この人は、主イエスが「だれであるか」知りません（ヨハネ5:13）。従って明白な形では、主への感謝も讚美も告白も見つかりません。

しかし、‘The Book’は、これを最後の事例として描いてはいません。神の喜ばれるような信仰告白をしている人物が、ヨハネ福音書9章および20章には登場しています。生まれつき目の見えない人、そして、「疑い深い」とも称される12弟子の一人・トマスです。特に、前者の場合、主イエスに二度目出会ったときに、「主よ、信じます」（ヨハネ9:38）とひざまずいて告白している点で、主イエスの側から二度出会ってくださりながらも、告白に至らなかったヨハネ福音書5章の事例を克服しています。そして、その生まれつき目の見えない人の後を受け継ぐように、復活の主との出会いにおいて、トマスは「わたしの主、わたしの神よ」（ヨハネ20:28）と信仰告白しています。「キリストご自身が人間の内に呼び起こし、造りだされたものである」信仰（P.アルトハウス）が、トマスの口をもって言い表されたのです。同時に、告白はリズムカルな讚美になっています。

ヨハネ福音書の頂点とも言える、このトマスの信仰告白は、自分の曖昧な反応を省みるよう促します。そのことが、礼拝において悔い改められるよう、今日のテキストをたどっていきましょう。

ところで、本日の讚美歌（I-392番〔奉仕〕と367番〔勤労〕）は、主イエスはいつも働いておられます、私たちもまた、主に倣って奉仕できますように、という主旨から選んだものです。それに合わせて、本日の説教題を「安息日に働く神の御子」と付けました。しかしよくよく考えてみると、そこには論理矛盾があります。「安息日に」と「働く」というのは、休むことと働くことですから、相反しています。厳格主義のユダヤ人はまさにそう思っていたことでしょう。

しかし、「主イエス・キリストにあって」、これを捉え直すと、決して矛盾していないことが分かります。一見、筋が通っていないように思われる「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも（安息日に）働くのだ」（ヨハネ5:17）という主イエスの言葉の深意を探ることにしましょう。

以下、箇条書きで――

①天地創造の第7日目の安息（創世記2:1-3）は、大原則です。

主イエスは、これを撤回などしておられません。だからこそイエスは、「安息日の主」（マタイ12:8、マルコ2:28）なのです。第7日目の安息を引き継ぐ形で、キリスト教においては、週の第1日目・日曜日に、私たちは礼拝をもって神の御前に安らいでいます。

②ではなぜ、主イエスは癒しの業を行って、「安息日」に働かれたのでしょうか。それは、「安息日」に、私たちが安息できるように、私たちが休めるように、主イエス・キリストが私たちに代わって、働かれたのです。

③「安息日」に、私たちが「安息」できていない、ほっと息がつけられないでいる状況があります。私たちが安らげないという最も大きな原因は、思い煩い^{わづら}です。思い煩いの原因はいろいろありますが、つまるところ、それらは、罪と死の問題に起因しています。罪の誘惑^かに駆られて落ち着きません。あるいは、神の御心の通りに、聖^{きよ}く生きることができないと思い悩みます。自分の死について、恐れ、不安になります。

④安息を妨げている人々の不安、その究極の原因である罪と死の問題を取り除くために、主イエスは、まさに「安息日」に働かれました。主イエス・キリストは、安息日に働かれて、信仰者が享受すべき安息を回復してくださいました。神の新たなる恵みをもって、天地創造の第7日目の安息を取り戻してくださいました。それによって、私たちはこの休息の日に、ほっと息がつけるようになりました。

⑤如何に、主イエスは働かれたのでしょうか。

主イエス・キリストは、

i 安息日の前日・金曜日 十字架につけられ、死にて葬られ（使徒信条より以下同）

人間のすべての罪の背負い、それを贖われた。

ii ユダヤ人（旧約）の安息日・土曜日 陰府^みにくだり

人間の恐れている死に向き合われた。

iii キリスト者（新約）の安息日・日曜日 三日目に死人のうちよりよみがえり復活をもって、死の力を打ち砕かれた。

主イエス・キリストは、父なる神と共に、安息日の準備の日から、三日の間に、神の最も大いなる御業をあらわされました。

このように、神の御子は、安息日に、ひたすら働かれました。

動けなくなってしまった私たちに代わって……

⑥今、私たちは、天の国で、まことの安息にあずかる希望をもって、この世を歩んでいます。参照：ヘブライ人への手紙 4:1-11

神により、天の国の安息・平安の、先駆け・前味である「主の日」（の礼拝）に、私たちは招かれています。私たちが神の赦しにより、天の国に入れられる時、そこに、働くことなく、御父の傍らに安らいでおられる御子を見出すのではないのでしょうか。

整理して言えば、一見、論理矛盾のように思われる説教題「安息日^{あんそくび}に働く神の御子」が成り立つのは、主イエス・キリストの十字架と復活という大いなる救いの御

業が成し遂げられたからです。大いなる神の御子の働きの後、まことに、私たちが息をつき、神を讃美する時がやって来ました。

エレミヤ書 17:21-22——

21 主はこう言われる。あなたたちは、慎んで、安息日に荷を運ばないようにしなさい。エルサレムのどの門からも持ち込んではならない。22 また安息日に、荷をあなたたちの家から持ち出してはならない。どのような仕事もしてはならない。安息日を聖別しなさい。

安息日に「荷」を抱えて、エルサレムの城門を出入りしてはならない、と命じられています。荷物の持ち込み・持ち出しは、「仕事」に該当するから、と言います。ファリサイ派のユダヤ人などが遵守するこの掟によって、城内の静寂が保たれ、厳かに神礼拝が執り行われました。

そのような十戒の第四戒が、誰かにより破られそうになるならば、彼らは、「慎んで」、つまり、「魂をかけて」・「命を投げ捨てるほどに」、その破戒者を呪ったのです。「そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた」（ヨハネ 5:16）というのは、そういうことです。そして、イエスに対する迫害は、敵対や憎悪を経て、殺意へと至りました（ヨハネ 5:18）。

ヨハネ福音書 5:9-10——

9 すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。

その日は安息日であった。10 そこで、ユダヤ人たちは病気をいやしていただいた人に言った。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない。」

「床」、すなわち、病気の人が伏せていた簡易ベッド・敷物のようなものは、「荷」であり、安息日に担いで歩くことは、禁じられていた、とユダヤ人たちは主張しています。そもそも、エレミヤ書 17 章に禁止規定があると言うのです。

それに対し、38 年も病気で苦しんだ末、今日癒された人は、こう言いました。

ヨハネ福音書 5:11——

しかし、その人は、「わたしをいやしてくださった方が、『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と答えた。

みなさんは、安息日破りのかどで捕らえられそうになった、この人の回答を、どのように思われるでしょうか？ こういう答え方は、如何なものでしょうか？

状況は、ヨハネ 5:10 に記されている通りです。つまり、癒された人が、知らない人々（ユダヤ人たち）から、「ちょっと、そこのお方、荷物を担いでますね。今日は何曜日か、分かっていますか。安息日ですよ！」と呼び止められた場面です。

例えば、次のような応答が予想できないでしょうか。

「まことに申し訳ありません。しかし、私は今日、38年間患っておりました病から癒されたのでございます。それで今、家へ、自分の伏せっておりました床を運んで

いるのでございます。申し訳ありませんでした。それでは、床をその道端に置いて、家まで帰ることに致します。」（安息日に許される歩行距離が定められていたようですが…… 1 km弱か。参照：使徒言行録1:12）

しかし、ヨハネ5:11の受答えには、感謝と喜びをもって病氣回復を打ち明けている姿はありません。「いやして下さった方が……」と言って、話を、自分から他人へ逸らしています。要するに、十戒の第四戒を破るように、私は仕向けられたのだ、従って、違反の責任は仕向けた人にある、とでも言いたげです（参照：アダムやエバの責任転嫁 創世記3:12,13）。

主イエスに向き合っていないわけですから、この癒された人が信仰告白をしていないのは、理の当然とも言えましょう。

ヨハネ福音書 5:12——

彼らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」と尋ねた。

問い詰められた人の責任逃れが効を奏したのか、ユダヤ人たちの関心は、「床を担いで歩きなさい」と命じた者に向けられました。癒された本人を飛び越して、主イエス・キリストに的が絞られました。ここで私たちは、人間のいい加減さや悪意を超えて、真っ直ぐに十字架の道が開かれていくという神のご計画を知ることができるでしょう。

ヨハネ福音書5:13——

しかし、病気をいやしていただいた人は、それがだれであるか知らなかった。イエスは、群衆がそこにいる間に、立ち去られたからである。

安息日、改め、主の日に、私たちを罪と死の縄目から解放して下さったお方が、「だれであるか」、礼拝の中で知らされ、そのお方を拝むために、私たちはここに集っています。しかし、この人は「それがだれであるか知らなかった」と言います。

この人は、主イエスの起こされたしるし、癒しの御業を体験しながらも、主イエスを信じなかったようです。これは、神の御心によって、まず38年間も病気で苦しんでいる人を癒し、それから信仰へと導こうとなさったのかも知れません。忍耐をもって、人それぞれ、ふさわしい時に、主の前に信仰を言い表すように導かれるのが、神のご計画だからです。

しかし、神のしるしにあずかった人は二度目、主イエスに出会った時にも、信仰を明確に言い表すことはありませんでした。

ヨハネ福音書5:14——

その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会って言われた。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない。」

場面は、ベトザタの池のほとり（またはその近辺）から神殿の境内に代わりました。神殿の境内、まさに神の前にひれ伏すのに、ふさわしい場所です。主イエスの側から、この人に出会われました。礼拝というのは、神が臨在され、御業と御言葉をあらわされ、それに応じて、招かれた人々が御前に感謝・讚美・告白をささげることです。

主イエスが御業（しるし）を果たし、今、御言葉を告げるという形で、この人に臨まれました。この人は、神の呼びかけに答えているのでしょうか？ 「もう、罪を犯してはいけない」（他にヨハネ 8:15）という罪とは、「イエスが来られたのに、そのイエスとその言葉を拒む」（松永希久夫）ということなのですが……。どうして頑^{かたく}なにも、支配者なる神を受け入れようとしないのでしょうか？

ヨハネ福音書5:15——

この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた。

ここには、主イエスの前に、「主よ、信じます」（並行事例を参照のこと：ヨハネ 9:38）という告白は見当たりません。その後場面が切り替わっています。この人はわざわざユダヤ人たちの所に出向いて、安息日破りの張本人がイエスであることを通報しています。ほんとうに情けない人間の姿です。

嘆かわしくも、人のひと言によって、ユダヤ人たちのイエスに対する反感は、迫害から殺意へと激化していきました（ヨハネ 5:16,18）。これは、主イエスへの信仰告白の観点から言えば、告白が為されているのか為されていないのか、不明瞭な事例です。しかし、主イエス・キリストの十字架への道という面から観れば、私たちの受け取り方は一転します。信仰告白の失敗をも、神の救いの御手の内にあることが分かります。

すなわち、主イエスが御業と御言葉をもって、神の国を宣教なさっておられる中で、さまざまな人間の罪、すなわち、頑なさ、中途半端さ、拒絶、無関心などが露わにされていきます。人間の敵意や殺意を巻き込みながら、主イエスは十字架の丘へ進まれるのです。神の御旨は、中断することも妨げられることもなく、大いなる救いの成就に向かっていきます。

ヨハネ福音書 20:27-28——

27 それから、（イエスは）トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」 28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

この説教の最初にも掲げたトマスの告白には、驚きと感謝が言い表されています（竹森満佐一）。

ヤコブは、愛する息子ヨセフが、まだ生きていと聞いた時、「心は冷やかなままであった」（創世記 45:26：新共同訳は「父は気が遠くなった」）と記されています。しかし直後に、ヨセフの言葉が兄たちから残らず語られると、ヤコブは驚きをもって、息子が生きていことを受け止めました。元気を取り戻して、エジプトへと旅立ちました。私たちは Wonderful な〈すばらしい〉信仰生活を送っているでしょうか。健全な・福音的な「驚き」（Wonder）に満たされている（ful）でしょうか。

今日、私たちは教会に戻って来ました。とりわけ、月の第一主日、主が聖餐と説教をもって臨在されています。再び、主イエスが私たちに出会ってくださった今、38年間病で苦しんでいた人の道に行くのか、それとも、生まれつき目の見えなかった人や弟子のトマスの道に行くのか、その岐路に立っています。そこで、真心を込め、正しい信仰告白を言い表すというのは、難しいことなのでしょうか。

ヨハネ福音書 5:18——

このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。

ここに、キリスト教で言う「神」とは、どんなお方であるのか、説き明かされています。

主イエスは、私たちが弱く貧しい者であることをご存知です。ここで、主イエスは、信仰告白できなかつた人間に代わるかのように、イエス・キリストとはどのようなお方であるか、述べられています。

第一に、神に、「アッバ、父よ」と呼びかける（マルコ 14:36）ことが挙げられています。すなわち、「御子である私は神を父と呼びます。その私があなたがたもまた、父よと言うことを許します」という主イエスの勧めです。

第二に、主イエスは御自身を、預言者でもなく、奇跡を行う者でもなく、「神と等しい者」とであると告知されました。父なる神と子なるイエス・キリストは、ひとつであるということです。

そこで、父なる神は、愛と正義をもって、人々を救うために、この世にイエス・キリストを遣わされました。そして、御子を十字架につけさせられ、三日後によみがえらせました。父なる神の御心を、御子が成し遂げられたのです。

38年間も病気で苦しんでいた人の口からは、信仰告白が発せられていません。しかし、主イエス御自身が、神とはこういうものである、キリストとはこういうものである、と私たちに教えてくださっています。

一人では、弱く乏しい者です。どうか、私たち、皆の信仰告白において、今、主イエス・キリストが臨在されているということ信じようではありませんか。聖霊なる神のとりなしをお祈りいたします。